

異世界 子育てしながら冒険者します

ゆるり紀行

8

Minazuki Shizuru
水無月静琉

登場人物

ベクトル

タクミの契約獣となった
スカーレットキングレオ。
小型にもなれる。

マイル

タクミの契約獣となった
フォレストラット。

ボルト

タクミの契約獣となった
サンダーホーク。

タクミ・カヤノ

異世界に風神の眷属として
転生した本作の主人公。
アレンとエレナの保護者。

ジュール

タクミの契約獣となった
フェンリル。
小型にもなれる。

フイト

タクミの契約獣となった
飛天虎。小型にもなれる。

エレナ

水神の子で、タクミに
保護された少女。
格闘術が得意。

アレン

水神の子で、妹・エレナと
ともにタクミに保護された
少年。格闘術が得意。

第一章 いろいろ作ろう。

僕は茅野巧^{かやのたくみ}。元日本人。

何故^{なぜ}“元”がつくかと言うと……今僕がいる世界、エーテルディアの神様の一人である風神シルフィリール——シルが時空の裂け目を直そうとした際に、力加減を間違えた影響で死んでしまったからだ。まあ、不慮^{ふりよ}の事故だな。

責任を感じたシルによって、眷属^{けんぞく}としてエーテルディアに転生した僕だが、飛ばされた先はガヤの森という危険な場所だった。

そこで出会った幼い二人の子供達の面倒を見ることにした僕は、自由気ままな冒険者としての生活が始める。

その過程で子供達——アレンとエレナが水神様の子供だということがわかり、今では本当の弟妹のように可愛がって一緒に生活している。

そんなアレンとエレナは先日、誕生日を迎えて六歳になった。

誕生日パーティでたくさんの人にお祝いしてもらった二人は、一晩明ければ迷宮に行こうと催促^{さいいそぎ}、

してくるほどに行動的だ。

まあ、元々約束していたことだったので、僕と子供達は契約獣達も連れて、『巨獣迷宮』に向かった。

前に一度行った時は、僕達が滞在するガデア王国の第三王子であるアルフィード様達も同行していたから、六日ほどかけて十階層に辿り着いた。だけど今回は、子供達が大変張り切ったこともあって、大量の肉を手に入れつつ、五日であっさりと攻略してしまったのだった。

そんな迷宮攻略を終え、新しい年になり、寒さが薄れつつある今日この頃。

「あっ！ しまった！」

王都にあるルーウェン伯爵家の邸、その一室でゆつくりと休んでいた僕は、シルにお願いされていたアイスクリームをまだ送っていなかったことを唐突に思い出した。

「なーに？」

「アイスクリームをあげるって約束していたのを忘れていたんだよ」

「アレンもあいすたべるー」

「エレナもあいすたべるー」

あげるのであって、食べるわけじゃないんだけど……まあ、いいか。

「アイスの在庫はまだあるけど、時間もあるし……作るか！」

「「つくるー！」」

《無限収納》に入っているストックは、外出先で食べたい時のためのものだから、なるべく切らしたくない。

一月——春になったとはいえまだ寒いので、アイスクリームを外で食べることはないけど……暖かい部屋で食べるアイスクリームって、わりと好きなんだよね。

「シルに送る分と補充、あとは新しいアイスにも挑戦するか」

「あたらしいの!!」

新作と聞いて、アレンとエレナの目が輝く。

「手伝ってくれるかい？」

「うん！」

二人は元氣よく手を挙げた。

「アレン、つくるー」

「エレナ、たべるー」

「……おや？」

「んにゅ？」

「あれ？」

アレンとエレナは何かがおかしい、とばかりに左右対称に首を傾げる。

これはあれだよな？ エレナの「食べる」は、きつと言い間違いだよな。」

「エレナは手伝ってくれないのかな？」

「あっ！」

僕がそのことを指摘すると、二人は同時に声を上げた。

「えへへ、まちがっちゃった」

「あはは、エレナ、まちがえた」

そしてエレナは少し恥ずかしそうにペロツと舌を出し、アレンはそんなエレナを見て笑う。

「エレナもつくるの！」

「ははっ、じゃあ、お願いするよ」

「うん！」

可愛い間違いはあったものの、僕達は早速、厨房に移動してアイスクリーム作りを始める。

「さて、アレンとエレナは何の味のアイスが食べたいんだ？」

「んとねー……アレン、ちよこれーと！」

「んとねー……エレナはみるくー！」

「了解、チョコレートとミルクな」

うーん、シルに送る分は何の味にするかな。

チョコレート味は前に送ったので、それ以外の味がいいよな。

じゃあ、王道のミルクとイチと……それから新しく作ろうと思ってるミルクティーあたりにするかな。

「アレンとエレナには混ぜ混ぜをお願いしてもいいか？」

「うん、まぜまぜする」

「あとねー、たまごわる」

「お、じゃあ、お願いするかな」

まずは二人のリクエストであるミルクアイスとチョコレートアイスを作ろうと思うんだけど……刻んだチョコを入れて、チョコチップ系のアイスにするのもいいな！

「アレン、エレナ、刻んだチョコレートも入れて、カリカリの食感のアイスにするか？」

「おお、いいねえ」

僕の提案に、二人は目をキラキラさせる。

あ、あとはイチ味で作ってもいいかな？ チョコチップ系のアイスといえば、僕はチョコミントも好きなんだけど。

でも、ミントアイスってどうやって作るんだろう？ ミントエキスのものを混ぜるということとはわかってるんだけど、そのミントエキスがな。

ミントをレイ酒に漬け込めばいいのかな？ いや、それではあくまでもお酒であって、アイスには使えないか？

あ、蜜液——ガムシロップみたいな樹液じゅえきで煮出してみるか？ うん、やってみよう。
お酒と言えば、ラムレーズンアイスっぽいものを、ブランドーとレーズンに似ている乾燥かんぞうさせた
ククルの実で作れるかな？ 子供達には食べさせられない大人用だけど、やってみるか。

いや、困った。挑戦してみたいものがないっばいだ。

そうそう、氷菓子こりがしといえ、かき氷もまだ作っていなかった。

まあ、まず最初に、氷を削る機械を作ってもらわないといけないんだけどな！ あの魔道具屋の
お爺さんじいなら作ってくれるだろうか？

ホットプレートを作ってもらいたいと思っていたことだし、明日にでも訪ねてみよう。

そんなことを考えている僕をよそに、アレンとエレナはどんな作業を進めてくれていた。

「おにーちゃん、たまごわれた」

「二人とも上手！」

「えへへ」

いや、本当に上達したな。少し前まで卵を潰つぶしていたのが懐かしいよ。

「じゃあ、僕は他の材料を用意するから、次は混ぜるのをお願いな」

「うんー」

結局、チョコチップ入りのミルク味とチョコ味、シルに送る用に普通のミルク味、イチ味に、
紅茶の茶葉入りじゃなく、ミルクティーを使ったアイスを作った。それから、ペースト状になるま

ですり潰した黒ゴマで作ったアイス、粒餡つぶあんを混ぜ込んだアイス、ブランドーに漬けた干しククルの
実を入れたアイス、蜜液で作ったエキスを使ったミントアイスも。

早速、アレンとエレナと一緒に味見していく。

「あ、これは駄目だめだったか」

ほとんどのアイスが良い出来であったが、ミントアイスだけがちよつと失敗だったかな？

ミントエキ스가薄かったせいか、ミントの香りがほとんど感じられなかったのだ。それこそ、ほ
んのりミント風味っていう感じだ。

ミントが入っていることを知らなければ、ただのミルクアイスだと思うだろう。

「おいしいよー？」

「ミルクアイスとしてならな」

「みんと？ においするの？」

「そうか？ アレンとエレナはミント味も大丈夫なのか？」

「アレン、これすき。すつきり？」

「エレナもすき。さっぱり？」

ミントアイスって好き嫌いが出る味だと思うのだが、アレンとエレナは好きらしい。

とはいっても、今食べているミントアイスはそこまで味に出ているわけではないからな。

「でも、もっと濃い味にしたものはどうだろうな？ 今日はまだ試さないけれど、また作ってみよ

うか」

「たのしみ〜♪」

ミントアイスは時間ができたらまた作ることにしよう。

……おっと、忘れないうちにシルにアイスを送っておかないとな〜。

「よし、これでいいな。——じゃあ、チョコチップのミルクとチョコアイスを器に盛って、マティアスさんとレベッカさんのところに突撃するか？」

「とっげき〜」

今日は僕達の後見をしてくれているルーウェン伯爵家の当主、マティアスさんと伯爵夫人のレベッカさんがお邸やしきにいるようだ。

なのでそう提案してみると、アレンもエレナも目をキラキラとさせた。

「する〜」

器に盛ったアイスを《無限収納インベントリ》に入れて、マティアスさんとレベッカさんのいる部屋に向かうと、アレンとエレナは文字通り、二人に突撃していく。

「とっげき〜」

「おやおや、可愛い攻撃が来たぞ」

「あらあら、本当ね。二人ともいらっしやい。どうしたのかしら？」

ちようどお茶を楽しんでいたマティアスさんとレベッカさんは、子供達を大歓迎してくれた。

「あいす、つくったの〜」

「いっしょにたべよ〜」

「まあ、嬉しいわ〜」

それから僕達は、みんなでアイスを食べながらおしゃべりを楽しんだのだった。

あまりに楽しかったので気づかなかったんだけど、シルから大量のモウのミルクとコココの卵が送られてきていた。

……これはまたアイスを作って送ってくれという意味だろうか？

◇ ◇ ◇

「お爺さん、こんにちはー」

「「こんにちはー」」

「おお、おまえさん達か。よく来たのお〜」

翌日、僕達は街の魔道具屋にやって来た。

ここはフィジー商会のステファンさんに紹介してもらったお店なんだけど、見た目をあえてボロボロのお化け屋敷風やしきに偽装している、ちよっと変わった魔道具屋なのだ。

「作っていたいた道具、とても便利に使わせていただいています」

以前訪れた際にミキサーとジューサーを買い、さらには店主のお爺さんに、ハンドミキサーとミキサーまで作ってもらったので、そのお礼を言う。

「それは良かった。で、また何か作って欲しい道具ができたかい？」

「実はそうなんです。無理なら無理と言ってくれて構わないので、話を聞いてもらえませんか？」

「ふお、ふお、ふお。いいぞ。この老いばれに作れそうなものならよいのだがな」

「ありがとうございます！」

お爺さんが快く僕の話聞いてくれることになったので、まずはかき氷を作るための氷を削る魔道具と、ホットプレートのような魔道具を説明する。

「氷を薄く削るものと、大きめの鉄板に合う魔道コンロだな。うむ、その二つなら問題なく作れるだろう」

「本当ですか！」

これで、かき氷機とホットプレートが手に入るな。

「かきごおりー？」

「こんろー？」

「かき氷は氷を削って作るおやつだな。コンロはお肉をいっぱい焼くものだよ」

「「おおー！」」

アレンとエレナが、僕が頼んだ魔道具はどんなものか気になったようなので簡単に説明する。

すると二人は、目をキラキラさせた。

「お願いしてもいいですか？」

「「おじーちゃん、おねがい！」」

「ふお、ふお、ふお。構わんぞ。ただ、以前に作った回転刃を使う魔道具のように、削る刃や鉄板は鍛冶屋に特注になるな」

「構いません。あつ、鉄板は交換用というか、予備も一緒に注文してもらってもいいですか？」

「ん？ わかった、頼んでおこう」

あ、交換用の鉄板といえば、平らなタイプの他に、深さのある鍋タイプも欲しいよな。

ああ、あと、タコ焼き用のものとかも作ってもらえるかな？ でも、これは直接鍛冶屋にお願いしたほうがいいかもしれない。

「お爺さん、特注の鉄板の他に、鍋とかもお願ひしたいんですけど、お爺さんが頼む鍛冶屋さんはどういうもの……というか、僕の注文でも受けてくれますかね？」

「ああ、大丈夫だぞ。ヴァンの坊主のところは包丁や鍋を専門にしておるからのお。ふお、ふお、ふお、鍛冶屋でも何かいろいろ頼みたいものがありそうだのお」

「ええ、そうなんです」

「それなら店を教えるから、僕^わの代わりに注文に行ってもらおうとするかのお」

「はい、任せてください」

紹介してもらえてよかった。僕じゃあ、武器を作る店と鍋とかを作る店の見分けがつかないからな。

「あと、お爺さん、もう一つお願いしたいものがあるんですが、いいですか？」

「ん？ なんじゃい？」

「これなんです……」

僕は炊飯器すいはんきを《無限収納インベントリ》から取り出し、お爺さんに見せる。

「これと同じものは作れますか？」

「どれ、中をちいーと見せてもらおうぞ」

「はい、どうぞ」

ルーウェン家、リスナー家、城の人達、さらに以前カレーライスの昼食会を開いた際の他参加者から、ご飯を作る方法を聞かれていた。

しかし、僕が使っている炊飯器はシルから貰ったもので、買ったわけではない。

だから炊飯器を手に入れられるお店は知らないし、かといって鍋でご飯を炊く方法を正確に教えることもできない。

なので、炊飯器の複製ができないかなーと思ったのだ。

お爺さんは炊飯器を調べながら、感心したようにつんや呟く。

「ふむ……加熱が主軸のようだが、加熱温度や時間が細かく設定されているのぉ」

へー、そうなんだ。でも確かに、鍋でご飯を炊く時って、火加減を強くしたり弱くしたりした気がする。

「これは料理に使うものか？」

「はい、白麦を加熱するためのものなんです」

「白麦？ 白麦ってあの白麦か？ 食べるのかい？」

『白麦』というのはお米のことなんだけど、この世界では家畜かちくの餌えさとして扱われている。そのせいか、お爺さんは不思議そうにしていた。

「はい、その白麦です。食べてもらったほうが早いかな？」

僕は作り置きしていたホカホカのご飯を《無限収納インベントリ》から取り出してお爺さんに手渡す。

「パンの代わりにしたりするんです。昼食には少し早いですけれど、おかずも用意しますので食べてみませんか？」

「ふむ、ご馳走ちそうになるかのう。だが、どうせならこの魔道具を実際に使うところを見たいんじゃないが……構くわんか？」

「大丈夫です。すぐに用意しますね」

お爺さんのリクエストに応じて、ご飯は一旦しまい、新たに出した白麦と水をセットした炊飯器を起動させる。

お爺さんが炊飯器をまじまじと観察し始めたので、僕は場所を借りて早めのお昼ご飯を用意することにしました。

「何がいいかな」

「しょーゆー！」

「みそ！」

「そうだな。ご飯にはショーユとミソの味付けがいいよな！」

「うん！」

おかずを何にしようか悩んでいると、アレンとエレナがリクエストを言ってくる。

お爺さんにもご飯の魅力をわかってもらいたいの、やはりここは和食っぽい、というか定食っぽい感じにするかな。

「じゃあ……魚の塩焼きに……肉じゃが、浅漬け、味噌汁でどうだ？」

「いー」

よし、メニューは決まりだな。

ご飯は十分に炊き上がるから、さくさく作ってしまわないとな！

「おつ、止まったかのう？」

「できたみたいですわね」

レインボーサーモンという魚の切り身の塩焼きがもう少しで焼ける……と思ったところで、ご飯が炊き上がった。

マロ芋、タシ葱^{ねぎ}、ニンジンにオーク肉をいっぱい使った肉じゃがは《エイジング》の魔法を使ったのでうまく上がる。

キャベツとミズウリに昆布の細切りを入れた浅漬けは、アレンとエレナが一生懸命揉みこんでくれたので、これも大丈夫。

ダイコンとシイ茸^{たけ}の味噌汁は、ミソの実を溶かせば大丈夫だから……――

「アレン、エレナ、ご飯を混ぜてからお茶碗^{ちawan}によそえるかい？」

「できるー」

「じゃあ、お願いな」

「うん！」

ご飯をよそうのはアレンとエレナにお願いし、僕はおかずを仕上げてお皿に盛っていく。

「お爺さん、温かいうちに食べませんか？」

「おお、すまんのう」

せっかくだから炊き立てのご飯を食べてもらわないとね。

出来上がったお昼ご飯を出すと、お爺さんは嬉々^{きき}として食べ始めた。

「おお、これは美味い」

「おいしい」

「白麦がこれほど柔らかくなるのか。うん、おかずとの相性も良いのお」

お爺さんはとても気に入ったらしく、ぺろりと完食した。

もちろん、アレンとエレナも残さず食べる。そういえば、二人は魚や野菜なんかの好き嫌いはいない。

「——それで、どうですか？」

「ふむ……結論から言くと、儂では同じものは作れなそうだ」

食事を終え、いよいよ炊飯器が作れるかどうか聞かすが、お爺さんからはそんな答えが返ってきた。

「……そうですか、残念です」

「これこれ、話は最後まで聞きなさい」

「え？」

落ち込む僕に、お爺さんが呆れたように注意してくる。

「同じものは無理だが、下位——劣化版なら作れそうだ」

「え？ 作れるんですか？」

お爺さんの言葉で、落ち込んでいた気持ちが浮上する。

「これには時空魔法を使って時間を短縮する仕組みが組み込まれておる」

「あ、そういえば……」

確かに、この炊飯器はかなり短い時間でご飯が炊き上がる。そういうものだと思っていたから何も考えていなかったが……時空魔法が組み込まれていたのか。

「時空魔法を組み込むのは儂には無理じゃ。だが、それ以外ならば可能だ」

「おお」

じゃあ、結果的には炊飯器は作れるんだな！ それは朗報だ！

時間短縮ができないといっても、普通に炊けば三十分から一時間くらいで炊き上がる。だったら、全然問題なんてないもんな。

「ぜひ作ってください！」

「うむ。儂も白麦が気に入ったのでな、喜んで作らせてもらおう」

「ありがとうございます！」

炊飯器については、複数作ってもらうようお願いしておいた。

魔道具屋を後にした僕達は、お爺さんに紹介された鍛冶屋へと向かった。

お爺さんが作ってくれる魔道具に使うものの以外に、僕も作ってもらいたいものがあったんだよね。本当はマティアスさんに店を紹介してもらおうと思っていたのだが、思わぬところでつないでもらえたよ。

「こんにちはー」

「こんにちはー」

「いらつしやいませ」

「えっと……違ったらすみません、ヴァンさんでしょうか？」

「ん？ そうだが？」

出迎えてくれたのは、三十代くらいの男性。お爺さんはヴァンさんのことを「坊主」と言っていたので、少し自信はなかったが……合っていたようだ。

僕よりずっと年上なんだけど、お爺さんからすれば坊主なのだな。

「僕、魔道具屋のお爺さんから紹介されて来たんですが……」

「魔道具屋？ ボロ屋敷のソル爺さんか？」

「あ、そういえば名前を聞いていなかったです。店はその……ボロ屋敷風な店構えですね」

魔道具屋のお爺さんはソルさんという名前らしい。「お爺さん」とばかり呼んでいたから、すっかり名前を尋ねるのを忘れていたよ。

「じゃあ、ソル爺さんで間違いないな。しかし、ソル爺さんからの紹介なんて珍しい。注文は何だ？」

「まずはこれをお願いしたいのですが……」

「ん、どれどれ……」

僕はまず、ソルお爺さんに書いてもらった炊飯器の釜、かき氷機用の刃、鉄板などの寸法が書かれた紙をヴァンさんに渡す。

「変わった大きさのものばかりだな」

「難しいですか？」

「いや、このくらいなら問題ないな」

「本当ですか？ それじゃあ、お願いします。それで、どれも複数お願いしたいんですけど、数は――」

炊飯器は複数作ってもらう予定なので多めに。かき氷機の刃も欠けてしまう可能性があるし、鉄板と一緒に予備用をお願いした。

鉄板はさらに深めのものと、タコ焼き用のものも作ってもらうことにした。タコ焼き用の鉄板は説明に苦労したが、絵を描きながら伝えたので何とか作ってもらえそうである。

「あとは……」

「まだあるのか？」

「ええ、急ぎではないですが、ぜひ作ってもらいたいですよね」

蒸し器用の鍋に超特大鍋、あとはサイズ違いの泡立て器がいくつか欲しい。

全ての注文を終えた時、ヴァンさんの顔が少々引き攣っていた気がするが、僕は前金を支払ってからお店を後にした。

◇ ◇ ◇

「いっばいかったね」

「買ったね」

鍛冶屋を後にした僕達は、まだ明るかったので街をぶらぶらと散歩する。
すると――

「ご飯をください！」

唐突に現れたヴィヴィアンに、そんな要求をされた。

彼女は以前、ベイリーの街近くで出会ったヴァンパイアの女性なのだが、出会う度にこうして食事^{ねだ}を強請^{ねだ}ってくる。

「……おい、ヴィヴィアン。お前の第一声はそれしかないのか？」

「あつ！ キキビを使った料理も完成しましたか？」

「おい！」

前回、確かにキキビ料理については、できたものを食べさせると約束していた。していたが……そうじゃない！

「あ！ タクミさん、これは赤麦という、ある地域に生える、白麦に似た扱いをされているものな

んですけれど……気になりませんかあ？」

ヴィヴィアンはそう言つて、何かが入っている革袋を掲げて見せてくる。

赤麦？ 白麦と似たような扱いということは、家畜の餌に使われているってことだよな？

ん、何だろうな？

「赤麦つて言うくらいなんだから、赤いものなのか？」

「粒自体は白麦よりも白っぽいですがね。赤麦つて呼ばれるのは、粒の周りについている皮^{かち}？ それが真っ赤だからですね」

へえ、皮が赤色か。

……ん？ そういえば、白麦の皮の部分が何色かも、どんな風に生えているかも知らないよな。自分が知っている稲のように、穂^ほに米が入っていると勝手に思い込んでいたが……そうとは限らないか。

というか、絶対に違う気がしてきたよ！ だって、普通に手に入る白麦が綺麗^{きれ}に精米されているんだから。家畜の餌なら、あんなに綺麗に粉^{もみ}殻^{がら}を外したりしないだろう。

「ヴィヴィアン、僕は白麦が生えているのを見たことがないんだが、あの白い粒つてどの部分なのか知っているか？」

「はい、知っていますよ。えっと……私の膝丈^{ひざたけ}よりも少し高いくらいの植物で、上部のほうに丸い袋状の殻^かがいくつか連なっていてえ。その殻の中にあの白い粒が入っているんですよ」



「……ん、地球の稲と同じように聞こえるかな？ いや、だが待てよ――」

「一粒ずつ殻がついているのか？ それで、赤麦も同じか？」

「まあ、質問が多いですね。私は早くご飯が欲しいんですけど……仕方がないので答えますから、ご飯を奮発してくださいよ。それで答えますが、一つの殻は硬貨くらいの大きさで、一つに二十粒くらい入っていたはずですよ。で、赤麦は本当に色違いなだけですね」

「ああ、やっぱりちよっと違った。ヴィヴィアンの説明だと、玄米はないのかな？」

「それにしても米に似たものか。似たもの……って――まさかっ！」

「ヴィヴィアン、その赤麦をちよっと見せてくれ」

「はいはい。これですよ」

ヴィヴィアンから渡された、そこそこ重みのある革袋の中身を見る。

確かにヴィヴィアンの言う通り、見た目はほとんど米だが、これはもしかして……モチ米かな？

「なーに？」

アレンとエレナも僕の両脇から袋の中を覗き込む。

「たぶんモチ米だと思うんだけどな」

「もちごめー？」

「そう。ご飯よりもっとモチモチしたものが作れるはずなんだ」

これがモチ米なら、蒸したものを潰して……ショーユに海苔、大根おろし、餡子に……大豆――

丸豆を炒^いつて粉にしたらきな粉もいけるか？ 結構いろいろ楽しめそうだな！ あつ、砂糖シヨ！
ユでみたらし風もいいよな！

「それ食べたいです！ タクミさん、早速作ってください!!」

「アレンもたべたい！」

「エレナもー！」

すぐさまヴィヴィアンがモチを食べたいと要求してきて、アレンとエレナも便乗する。

「アレン、エレナ。お昼ご飯を食べたばかりだろう？」

「おやつー！」

ソルお爺さんのところで昼食にしてからあまり時間は経ってないけど……おやつなら食べられるってことかな？

「さて、じゃあ、どこで作ってもらいましょうかね」

「……決定かよ」

「決定ですよ。だって、子供達も食べたがっているんですよ？ それをタクミさんが無視するなんてできないはずですよ！」

……確かに無視はできないが、ヴィヴィアンに言われると癪^{しゃく}だな。

「「もちもちたべたい……だめ？」」

「……くっ」

アレンとエレナの上目遣^{うめづか}いは、僕には効果抜群だ。

「……本当にモチが作れるか、僕も試してみたいしな。作ってみるか」

「「やったー！」」

「おお！ タクミさんがあつさり陥落^{かんらく}した！」

からかうようにこちらを見ってくるヴィヴィアンに、ジト目を向ける。

「ヴィヴィアン、煩^{うるせ}い！ ヴィヴィアンは試食しないんだな？」

「あ、すみません。黙ります！ なので、食べます！」

そうしてヴィヴィアンを黙らせ、僕達は前回クリームどら焼きを作った時と同様に、彼女が泊まっている宿へ移動した。

「とりあえず、これでいいな」

まずは炊飯器に、洗った赤麦と水を入れる。本当はしばらく水に浸^{ひた}しておいたほうがいいはずだが、それは《エイジング》で解決。蒸すのも炊飯器で普通に炊けばいいだろう。

炊飯器を稼働^{かどう}させたところで、モチに合わせる具材かタレを用意することにする。

「しよっぱいのと甘いのなら、どっちがいい？」

できる味付けを全部、というわけにはいかないので聞いてみると――

「「あまいのー！」」

「両方で！」

「あっ！ りょうほう！」

一旦、甘いものを選んだアレンとエレナだが、ヴィヴィアンの発言を聞いて意見を翻す。
ん、これは子供達にとつて悪影響になるだろうか？ それとも、このくらいだったら問題ないかな？ 微妙なところだ。

「……とりあえず、間をとつて甘じよっぱいのにするか」

水に砂糖とシヨーユを同量溶かし、軽く沸かしてトロミをつける。

そうこうしているうちに、あつという間に赤麦が炊き上がった。

「たけたー」

「じゃあ、潰すか」

僕の言葉に、アレンとエレナが不思議そうにした。

「つぶすー？」

「そうだよ。潰してモチモチにするんだ」

僕はそう言つて、炊き上がった赤麦を、熱々のうちに潰していく。

「ぺったん♪ ペったん♪」

アレンとエレナの声に合わせてすりこぎ棒で潰していけば、あつという間に粘りが出てきた。

モチつきみたいに力や時間を要さずに、簡単に僕の想像するモチ状態になった。

「ここまではモチだな」

「炊き上がりの見た目は白麦みたいでしたけど、全然違う状態になるんですね。それで？ もう完成ですか？」

僕は興味津々に覗いてきたヴィヴィアンに答える。

「あとはひと口サイズに丸めて、タレに絡めればでき上がりだな」

「丸めるのなら私でもできます。さ、さ！ 早く作つて食べましょう！」

四人でモチを丸めたら、あつという間に終わってしまったが……ヴィヴィアンの丸めたモチがかなり大きかった。

まあ、それはヴィヴィアンが食べればいいか。もともとこの赤麦はヴィヴィアンが持ってきたものだしな。

「「かんせい」」

「完成」

「よし！ じゃあ、食べてみるか」

「「わーい」」

……ヴィヴィアンが子供達と同じレベルになっている気がするが、早速モチを口に運んでみる。

「お」

想像通りの食感に、僕は安堵した。

モチだ。まごうことなきモチだ。やはり赤麦はモチ米で間違いなかった。

「ん〜ん〜」

みたらしモチを食べた三人が歓喜の声を上げる。あの様子だと、口に合ったのだろう。

「タクミさん、美味しいです！」

「そりゃあ、良かった。で、ヴィヴィアン。この赤麦はどこに行ったら手に入るんだ？」

「内緒です」

「おい？」

是非ともこの赤麦を手に入れたかったのだが、ヴィヴィアンは答えようとしなかった。

「いや〜、これは本当に教えられないんです。でもでも！ こんなこともあるうかと、たつぷりと確保してきましたので、それで許してください！」

「……」

場所は秘密ということには引つ掛かるが、赤麦が手に入るのならいいか。

「わかった。じゃあ、場所を聞かない代わりに、持っている赤麦を売ってくれるんだな？ いくらだ？」

「嫌です。売りません」

「おい！」

「私は物々交換しか受け付けません！ なので、対価は料理でお願いします！」

僕はヴィヴィアンらしい返答にがつくりと項垂れるが、キキビのスープなど適当に対価を用意して、大量の赤麦を手に入れたのだった。

たくさんの赤麦を譲ってもらい、再び街をぶらぶらしていたところで、僕はふと思った。

「モチと言えば、やっぱり臼と杵かな〜？」

今回炊いたモチ米は少量だったので、すりこぎ棒で潰すのは問題なかったが、もう少し量が多くなるとちょっと辛い。

いつもなら、お爺さんに魔道具を作ってもらわないと！ と思うところだが……先ほどたつぷりと仕事をお願いしてきたばかりなので頼みづらいだね。

「うすー？」

「きねー？」

「モチを作る、木でできた道具だよ」

僕が答えると、子供達は目を輝かせた。

「かうー！」

「ん〜、売っていないと思うぞ？」

「ええー！」

不満そうな声を出した二人は、いいことを思いついたとばかりに口を開く。

「じゃあ、つくる!」

そして、すぐに違う案を出してきた。とても的確な案である。

魔道具も便利だと思うが、臼と杵を使った従来のモチつきというものも子供達にやらせてみたいので、作るのは賛成だ!

「そうだな。作ってもらうか!」

「うん!」

「じゃあ、木を扱う工房だな。行くか?」

「いくー!」

というわけで、木工を専門とする店を探すことにした。

意外とすぐに見つけた店の前で、アレンとエレナが首を傾げる。

「ここー?」

「うん、どうやら家具を作る工房らしいけど、お願いしてみようか」

「おねがいする〜」

そうしてアレンとエレナは我先にと店に入っていく。

「こんにちはー」

「おやおや、可愛いお客様だね〜」

「こんにちは」

「はい、いらつしやい」

店に入ると、恰幅かつぶくの良い中年の女性がにこやかに出迎えてくれた。

「おねがいあるの〜」

「おやおや、注文があるのかい?」

「うん、ちゅうもーん!」

人の好きよそうな女性だからなのか、アレンとエレナは躊躇ためらいなく話し掛けていく。

「すみません。こちらでは個人の注文は受けてくれませんか?」

工房によつては特注を受け付けていないと聞いたことがあったので、最初に確認する。

「もちろんだよ。家具かい?」

「道具になるのかな? 形状は、すり鉢ぼちの大きいものと木槌きづちですね」

「おや、それなら問題ないさね。大きいと言っても、せいぜい私くらいの太さの木を使ったものだろう?」

「……」

特注が問題ないのは良かったが……女性から返答しづらいたとえが飛び出してきた。

「こちら、お客人が返答に困っているぞ」

困っていたら、店の奥から中年の男性が出てくる。

「あら、あなた、ちょうど良かったわ。特注のお客様だから、呼びに行こうと思っていたところ

ろよ」

「……オレの言葉は無視か？」

「ん？　じゃあ、任せたわ」

旦那さん^{だんな}のようだが、女性^{たしな}は彼の奢める言葉^{言葉}を完全にスルーする。

旦那さんは、なかなか苦勞^{くろう}していそうだ。今もぐつたりと項垂^{うなだ}れているよ。

「……お客様、待たせてすまないな。注文を聞こう」

「……お願いします」

後は任せた、とばかりに女性が店の奥へ戻っていくと、旦那さんが改めて注文を聞いてきたので、僕はもう一度、臼と杵について説明する。

すると、旦那さんからも問題なく作れるという言葉をもらったので、お願いすることにした。

「問題は、素材に何を使うかな」

「堅^{かた}くて丈夫なものがいいですね」

アレンとエレナが思いつきりモチをついても壊れない素材がいいんだが……うん、普通^{ふつう}の木だと駄目^{駄目}な気がしてきた。絶対に壊れる。

本当に頑丈^{がんじょう}な木じゃないと駄目だ！

「これはどうですか？」

というわけで、僕は《無限収納^{イネンソウ}》からガヤの木を取り出した。ちょうど良さそうな太さで、短め

に切られたものがあつたからな。

すると、アレンとエレナはそれが何の木かいち早く気がつく。

「「がやのきー？」」

「お、アレン、エレナ、よくわかったな」

「「わかったー！」」

「おい、ちょっと待て!?　ガ、ガヤの木だつてえ!!」

子供達の言葉に旦那さんはぎよつとして目を見開き、慌てて木を検分し始める。

「うお！　本物だ！」

「あ、でも、質の良い木だからって、堅いとは限らないか？」

勝手にガヤの木は堅いと思い込んでいたが、どうなんだろう？

そう思つて呟くと、旦那さんが慌てて首を振った。

「素材としては充分だ。充分すぎる！」

「本当ですか？　良かったです」

うん、大丈夫なようだ。

ガヤの木＝頑丈、というのは間違いなかったみたいだな。

「いやいやいや、ガヤの木はもつと他に使い道があるだろう!？」

「他にですか？」

「ああ、建物の支柱や家具なんかに使ったほうがいい素材だぞ！」

そういえば、ガヤの木で作った家具も頼みたいと思っていたんだっただな。

「ガヤの木で家具を作る場合、どのくらいの期間が掛かるんでしたっけ？」

「ん？ そうだな、簡単なものでも一カ月。細工の細かいものなら、五、六カ月は必要だな」

「そんなに掛かるんですか？」

やはりガヤの木の加工には時間が掛かるのだな。

半年くらいとなると、ちよつと頼むのを躊躇^{ためら}ってしまう期間だ。

「じゃあ、先ほど僕が頼んだものならどのくらい掛かりますか？」

「あれは作りが簡単だからな。多少、削り込みに時間が掛かるが……そうだな、だいたい十日ほどかな？」

作りは簡単でも十日掛かるのか。ガヤの木はそれほど堅いということなのだろう。

しかし、臼と杵を作らないという選択肢はないよな。

「じゃあ、とりあえず、そちらをお願いしますね」

「家具じゃなくて、すり鉢のほうをか!？」

「はい、そっちです」

設置する予定のない家具よりは、臼と杵のほうが優先だよ。

「うす、おねが〜い」

「きね、おねが〜い」

「……うすときねというのは何だが知らんが……任せておけ」

駄目押しとばかりに、アレンとエレナがお願いすると、旦那さんはがくりと項^{うな}垂れる。

しかし、しっかりと引き受けてくれたので、安心してお願いしたのだった。

第二章 挨拶回りをしよう。

「えっ!? レベッカさんも領地に行くんですか?」

「ええ、そうなの」

ルーウェン家の邸やしきの一室で、僕が思わず声を上げると、レベッカさんが頷うなずいた。年が明けた現在、王都の社交シーズンは既に終わっている。

王都に集まっていた貴族達はほとんど領地に戻っていて、リスナー家のセドリックさん、テオドルくん、ラティスくんも近いうちに領地に戻ると連絡が来ていた。

そして、ルーウェン家の長男夫婦であるヴェリオさんとアルメリアさんも、身重であるアルメリアさんの体調が良いうちに領地に戻るそうだ。

「ほら、アルメリアがああ状態でしょう? ですから、私も領地に行っている手助けをすることにしたの」

確か、ルーウェン家の領地は、王都で仕事のあるマティアスさんの代わりに、ヴェリオさんが領主代行をしているんだったな。

すると、奥さんであるアルメリアさんも領地では何かしら手伝うことがあるはずだ。

今はまだ目立たないが、すぐにお腹が大きくなってきて、思うように行動できなくなるんだろうな。

であれば、レベッカさんが二人について領地に戻るのも納得できる。

「そうなんですね。それで、出発はいつなんですか?」

「それが、五日後なのよ」

「えっ!? すぐじゃないですか!」

もっと時間があると思っていたのに、あまり猶予ゆうよはないようだ。

急な気もするが、もしかしたらもっと前から決まっていたのかもしれないな。

「……おばーさま」

「アレンちゃん、エレナちゃん、どうしたの?」

「おばーさま、どっかいつちゃうのー?」

「あらまあ! それで泣きそうなお顔をしているの?」

「うう~~~~」

僕とレベッカさんのやりとりを眺めていたアレンとエレナは、今にも泣きそうな顔をしていた。そんな子供達を見て、レベッカさんはほのかに嬉しそうな顔をする。

「離れるのが悲しいなんて、私、感激だわ」

「……うにゅ~~~~」

……いや、かなり嬉しそうだ。

「私もアレンちゃんとエレナちゃんと離れるのは寂しいもの。そうだわ！ アレンちゃんとエレナちゃんも一緒に行きましようか！」

「いつしょー？」

「ええ、アレンちゃんとエレナちゃんはお兄さんといろいろな街を見て回っているのでしょうか？ それなら、次はルーウェン領の街に行ってもいいじゃない！——ねえ、タクミさん、良い案だと思わない？」

「そうですね……」

レベッカさんの言葉に、僕は考える。

王都にはそれなりの期間いたので、そろそろ違う街に行ってみようかと思っていたのは確かだ。まあ、どこに行こうかは全然決めていなかったけどな。

「別の街に行こうにもまったく当てはなかったので、嬉しいお話ですね。だけど、それではまた甘えることになりそうで……」

きつとまた、ルーウェン家の邸でお世話になってしまおうことだけが気がかりだった。

「あら、甘えると言っているけれど、滞在場所だけでしょう？ そのくらいなら甘えるとは言わないわよ。だいたい、それ以上に私達だってタクミさんにはお世話になっているわよ」

「え、そうですね？」

「そうよ」

何だろう？ 僕的には一方的にお世話になっていると思っていたが、そうではないらしい。

んー、僕がルーウェン家に提供したものね……食材かな？ まあ、それを今考えても仕方がないか。

「アレンとエレナはどうしたい？」

「「いきたいー」」

「それはルーウェン領の街に？」

「「うん！」」

泣きそうだったはずのアレンとエレナは一転、強い眼差しで訴えてくる。

「よし、じゃあ、行こうか」

「「ほんとー？」」

「うん。まあ、しばらくはレベッカさんと離れることになるけどね」

「「なんでー？」」

ルーウェン領の街に遊びに行くのはいいいけど、五日後に出発するレベッカさん達と一緒にには行けない。

だって、注文した魔道具や白と杵を受け取らないといけないし、自領に戻るセドリックさん達も見送りたい。

「王都でやり残したことがあるからね。それが終わってから出発するとして……」レベッカさん、ルーウェン領は王都から西に行ったところでしたよね？」

「あら？ タクミさん……もしかしてローヴェル領と勘違いしているんじゃないかしら？」

「えっ!？」

「ルーウェン領は王都の東の海沿い。セルディーク国との交流が盛んな街、ルイビアがそうよ」

うわっ、凄^{すごい}い勘違いをしていた。西じゃなくて、東！ 正反対じゃないか！

今、確認しておいてよかった〜。

「危うく違う場所に行くところでした」

「ふふっ、良かったわね〜」

「ええ、本当に。えっと……王都とルイビアの街の間にはまだ他の街がありますよね？」

「ええ、あるわね。——ああ、そういうことね」

僕が考えていることがわかったのか、レベッカさんはにつこりと微笑^{ほほえ}む。

「アレンちゃん、エレナちゃん、他の街も見ながらゆっくりルイビアの街に来てちょうだい」

「ほかのまちー?」

「そうよ。二人はまだまだ知らないものがいっぱいあるでしょう？ だから、いろんなものを見て、感じて……たくさん経験することも大事よ」

「……だいじ〜」

そう、僕は真っ直ぐにルイビアの街を目指すんじゃなく、せっかくなので間にあるだろう街や村なども堪能^{たんのう}しつつ向かおうと思っているのだ。

レベッカさんは、そのことをしっかり理解してくれていた。

「ははは〜、レベッカさん、代弁ありがとうございます」

「ふふっ、合っていたようね」

「ええ、僕の考えていたことと同じだったので驚きましたよ」

本当に、僕の考えを読んだかのようにだった。

「レベッカさん、準備があると思いますが、出発までの間、時間があったらアレンとエレナを構^{かま}ってあげてもらえますか？」

「もちろんよ」

それからというもの——

「おばーさま、おやつたべよー」

「おばーさま、ごはんようー」

アレンとエレナは“外に遊びに行きたい”“依頼を受けに行きたい”などとは言わず、カルガモの雛^{ひな}のようにレベッカさんについて回るようになった。

「——アレンちゃん、エレナちゃん、お茶にしましょうか」